

## 共同研究グループ活動報告（2018 年度）

### 日中関係史

本年度は合計 5 回の例会を開催し、2018 年 5 月には中国・江蘇師範大学で開催された国際シンポジウムに共同研究のメンバーが参加し、報告を行った。また、人文学研究所・2018 年度叢書の刊行に採択され、現在、論文集『中国人留学生と「国家」・「近代」・「愛国」』（仮題）の刊行に向けた準備を進めている（A5 判・上製・カバー装、2019 年 3 月予定、東方書店）。以下、本年度に開催された研究会の活動を箇条書きで記す。

#### (1) 第 60 回例会「戦後華僑・留学生を語る」の開催

日 時：2018 年 5 月 26 日（土）

場 所：神奈川大学横浜キャンパス 20 号館 212 室

共 催：中国人留学生史研究会、科研・教育交流（基盤 B・一般、課題番号 17H02686）

内 容：◎「戦後華僑・留学生を語る」（陳学全さん、江洋龍さん、コメント符順和さん）

◎「5 月 18 日～21 日 江蘇師範大学のシンポジウム報告」（見城悌治、孫安石）

◎ 2018 年の年間計画の打ち合わせ

#### (2) 第 61 回例会の開催



日 時：2018 年 7 月 21 日（土）

場 所：神奈川大学横浜キャンパス 20 号館 212 室

共 催：中国人留学生史研究会、科研・教育交流（基盤 B・一般、課題番号 17H02686）

内 容：◎「中国人留学生の研究と社会学のデータ分析」李敏氏（信州大学）

◎「早稲田大学における南洋公学の中国人留日学生」鄭海洋（西安交通大学日本校友会）

◎「5 月 18 日～21 日 江蘇師範大学のシンポジウム報告」（胡穎、中村みどり）

#### (3) 第 62 回例会「論文集・予備報告会」の開催



日 時：2018 年 9 月 22 日（土）

場 所：神奈川大学横浜キャンパス 20 号館 212 室

共 催：中国人留学生史研究会、科研・教育交流（基盤 B・一般、課題番号 17H02686）

内 容：◎「清末における留日学生の同郷会について」胡穎（神奈川大学非常勤講師）

◎「華北政務委員会と中国人留学生」池田健雄（千葉大学特別研究員）

◎「『訳書彙編』と清末の中国人留学生の雑誌出版」郭夢垚（神奈川大学大学院修士課程）

◎「清国留学生会館研究初探」孫安石（神奈川大学）

(4) 第 63 回例会「論文集・予備報告会」の開催



日 時：2018 年 10 月 27 日（土）

場 所：神奈川大学横浜キャンパス 20 号館 212 室

共 催：中国人留学生史研究会，科研・教育交流（基盤 B・一般，課題番号 17H02686）

内 容：◎「余計者としての留日学生——張資平『一班冗員的生活』」林麗婷（同志社大学助手）

◎「日記から読み取る清末留学生の日常生活」欒殿武（武蔵野大学）

◎「満州国留日学生会の活動について」見城悌治（千葉大学）

◎「中華学芸社の機関誌『学芸』（1917-1937）について」潘吉玲（早稲田大学，博士課程）

◎「清末中国人日本留学の政策と郭開文の日本留学」劉建雲（日本大学，非常勤）

(5) 第 64 回例会「論文集・予備報告会」の開催



日 時：2018 年 11 月 10 日（土）

場 所：神奈川大学横浜キャンパス 20 号館 212 室

共 催：中国人留学生史研究会，科研・教育交流（基盤 B・一般，課題番号 17H02686）

内 容：◎「『対支文化事業』における特別講習会」三村達也（千葉大学，特別研究員）

◎「満洲国日本留学生統計資料に関する研究」李思齊（一橋大学，博士課程）

◎「1950 年代の中国留日同学会と華僑社会」大里浩秋（神奈川大学，名誉教授）

◎「詩と愛国——留米の聞一多と留日の穆木天」鄧捷（関東学院大学，教授）

（文責 孫安石）

## 色彩と文化Ⅳ

「言語景観」を「外国語教育」に応用できる理論的枠組みを模索しつつ言語ごとに調査活動を行っている。

(1) 研究会の開催：

日 時：7 月 23 日（月） 16：30～18：00

発表者 1：鈴木幸子（本学国際文化交流学科教員）

テーマ：「日本の観光地の言語景観と英語教育への活用

：緊急事態の対応—危険を知らせる

発表者 2：佐藤裕美（本学英語英文学科教員）

テーマ：「オバート（タスマニア）の言語景観と英語教育への活用——固有の歴史，多文化を背景にした英語と世界語としての英語」

## (2) 海外調査

佐藤裕美は、2019年2月16日からイタリアのパドヴァに出張を予定している。出張では、イタリア語の文法性の一致現象とジェンダーの多様性に関して、イタリアでの公文書での対応の試みについて調査を計画中である。言語景観については、ベネチアとその周辺の街中の標識で、ベネト方言での表記、標準イタリア語での表記の分布や傾向について資料収集するつもりである

鈴木幸子は、2019年3月10日からカナダのヴァンクーバーとヴィクトリアに出張を予定している。前回の発表で扱ったトピック「防災」を中心に観光地で見られるサインの調査をする計画である。カナダはフランス語と英語が公用語なので二言語は当然として、移民の国でもあるため、多言語での案内について、観光政策の中での扱いがどうなっているのかも視野に入れて研究するつもりである。

尹亭仁は、2018年8月19日～22日の4日間北京に滞在し、共同研究者の北京電通の林福子さんと北京空港・北京駅・王府井・北京イトーヨーカドー・地下鉄の表示を中心に調査を行なった。この調査の結果は「漢字文化圏—東京・ソウル・北京における言語景観の比較」(仮称)のタイトルで投稿する予定である。

さらに、2019年3月12日～18日の7日間、ロンドンでの調査を計画している。2014年に発表したニューヨークでの言語景観との比較に加え、ロンドンにおける日本語、韓国語、中国語などの東アジア言語を中心とした多言語表示にも目を向け、アジアでの現状との比較を試みるつもりである。

2019年度より調査の結果を研究会で発表するだけでなく、論文として発信するなど、共同研究を本格化していく計画である。

(文責 尹亭仁)

## 言語変異研究

1. 研究内容：今年度は主に日本語と中国語を比較する視点から、社会言語学に関連する総合的な研究を行ってきた。論文の執筆は、歴史的言語景観に関するものと異文化語用論のテーマに関するものを中心に行った。
2. 今年度の主な研究成果：  
「日中命題モダリティの異文化語用論の探究——「過剰含意」発生のメカニズム」『社会言語科学』Vol. 21-No. 2 日本社会言語科学会 2018年9月 p 52-63
3. 今年度主な研究所蔵資料の収集：  
『大満洲国風景』大正写真工芸所 昭和9年  
『上海大観』八千洋行 昭和6年  
『明画全集』浙江大学 2017年
4. 2019年度も引き続き歴史言語景観と異文化語用論について研究調査を実施する予定である。

(文責 彭国躍)

## 〈身体〉とジェンダー

1. 講演会・研究会の開催
  - ・第1回研究会（講演会）(昨年度の報告書に未記載のため)  
開催日：2018年3月30日（金）  
会場：17号館216室  
発表者（所属）：古屋耕平（本学外国語学部英語英文学科）

演 題：「カウボーイと家庭と原子爆弾——西部劇小説『シェーン』と核／家族の物語」

・第2回研究会（講演会）

開催日：2018年9月14日（金）

会 場：17号館216室

発表者（所属）：田村和彦（関西学院大学教授）

演 題：「ファシズムと男性性妄想——クラウス・テーヴェライト『男たちの妄想』を手掛かりに」

2. シンポジウムの開催 なし

3. 活動内容

〈身体〉とジェンダー研究会は『68年の〈性〉』を2015年度に出版したが、その後に続く企画として、男性表象をテーマにした叢書の出版を目指して発表を組織してきた。今年度については第1回研究会では、研究グループメンバーの古屋耕平先生に「カウボーイと家庭と原子爆弾——西部劇小説『シェーン』と核／家族の物語」という演題で発表していただいた。西部劇映画でとりわけ有名な『シェーン』について、小説テキストを掘り下げ、第二次世界大戦や冷戦期のアメリカについての言及、とりわけ主人公の男性表象を〈家庭〉神話との関係から読み解く試みであった。戦争や原爆という暴力の発露の後で、それをどのように正当化し、受け入れるか、という問いが隠されたこの作品が、日本をはじめさまざまな翻案を生んだという点は、アメリカと男性性の伝播という意味でも重要なことであった。

また第2回研究会では、関西学院大学教授の田村和彦先生を招いて、「ファシズムと男性性妄想—クラウス・テーヴェライト『男たちの妄想』を手掛かりに」（2018年9月14日）というタイトルで講演を行った。テーヴェライトはその著作で、第一次大戦直後に結成された国家の体裁を守るための義勇軍と、その後国防軍に吸収され、やがてナチス党政権でのSSとして復活する軍部の流れを、どこか中性的な政治文脈で語るのではなく、「兵士の男性」、すなわち男たちの物語として語り直している。その際、中心的な概念として浮かび挙がるのが、武装した男たちの「肉体の甲冑」、そして彼らが身につける拳銃、大砲、戦闘機といった「延長された身体」イメージと、対してその肉体の甲冑で必死に食い止める、どろどろのもの、流れるもの、洪水としての女たち、あるいはおぞましい同性愛者、民族、プロレタリアート、群衆といったイメージである。テーヴェライトは、その個体的、あるいは集団的なイメージこそが「男性性妄想」であり、その本質が暴力と常に一体化していることにおいてファシズムの温床であると説く。テーヴェライトのこうしたアプローチ自体は、テーヴェライト自身が個人史を並置することで示しているように、ナチス世代でもある親世代への糾弾といった、ドイツにおける68年世代に典型とされる文脈にありながらも、昨今ますます注目される社会学的な分析をメインとした男性学とは異なる、より心理学的で、表象的な分析による男性学の在り方として、忘れてはならない重要な考察であると感じられた。本講演会には、学外からも多数の研究者が参加し、研究会は大いに盛り上がった。また、男性性を主題とする上でのヒントを多数得ることができた。

また、長く「〈身体〉とジェンダー」共同研究に携わってきた山口ヨシ子先生のご退職を記念した、『人文研究』第196号に、多くのメンバーが寄稿した。〈身体〉とジェンダー研究に関係するものが多く、来年度の叢書発行に向けた準備が着々と整いつつある。

（文責 熊谷謙介）

## 自然観の東西比較

1. 研究会の開催

第1回研究会

開催日：4月25日（水）

会 場：17 号館 216 室

議 題：今年度の研究計画について

個別の研究報告はなく、今年度の研究打ち合わせを行った。発表の予定や講演者希望など。叢書の件（出版社の選定方法など）についても議論した。

#### 第 2 回研究会

開催日：6 月 27 日（水）

会 場：17 号館 216 室

発表者：上原雅文

演 題：①共同研究奨励助成の総括「最終報告書」について

②叢書の書名、構成について

#### 第 3 回研究会

開催日：8 月 1 日（水）

会 場：17 号館 216 室

発表者：上原雅文

演 題：世界史の中のさまざまな「神」をめぐって——叢書の構成との関係で——

#### 第 4 回研究会

開催日：11 月 28 日（水）

会 場：17 号館 216 室

発表者：小熊誠

演 題：風水と自然観——中国江西省贛南地区の村落調査から——

#### 第 5 回研究会

開催日：1 月 23 日（水）

会 場：17 号館 216 室

発表者：太田原潤（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科修士課程，元・青森県埋蔵文化財調査センター副参事）

演 題：文字の暦と非文字のコヨミ——自然観を背景としたコヨミをめぐって——

2. シンポジウムの開催 なし

#### 3. 活動内容

今年度はまず、2018 年度末刊行予定の叢書について（出版社、目次などの構成，論文相互の内容連関）時間をかけて議論した。原稿締切が 9 月末となったため，前期では個別の研究報告としての研究会は少なめにした。

7 月 13 日に，共同研究奨励助成の成果発表会で 3 年間の総括的な報告を行った。後に届いた評価書ではおおむね好評価であったが，コメントの中に，年度末刊行の叢書（共同研究奨励助成の報告）において，共同研究としての成果であるための，論文相互の関係についての記述を求めるものがあった。叢書に反映させたい。

（文責 上原雅文）

## ヒト身体の文化的起源

#### 活動内容

① 人間の身体を系統的に遡り，その根源を考察することで，身体が持つ機能的な意義を検討した。

I. 関節運動を増幅するアキレス腱の屈曲点に関する論文「A Multi-modality Approach Towards Elu-

cidation of the Mechanism for Human Achilles Tendon Bending During Passive Ankle Rotation.」が Scientific Reports 誌に掲載された。

また、アキレス腱の屈曲点の位置と増幅効果との関係性を調べた論文「Biomechanical gain in limb displacement from the curvature of the Achilles tendon: role of the geometrical arrangement of inflection point, center of rotation, calcaneus」を執筆し、投稿した。

- II. ランニング時の足着地法の違いがアキレス腱長や筋束長に及ぼす影響に関する論文「Forefoot running shorter gastrocnemius fascicle length than rearfoot running」を執筆し、投稿した。
- III. 以下の研究セミナーを開催した。

- ・「超音波診断装置の研究開発」三竹毅氏（(株) Lily MedTech 取締役）、5 月 25 日
- ・「詳細な 3 次元計測に基づいたヒト足部の歩行機能解明」伊藤幸太氏（慶應義塾大学理工学部機械工学科助教）、10 月 30 日
- ・「サッカーと実行機能の関係性——海外におけるサッカーに着目して——」酒本勝太氏（長友佑都フットボールアカデミーコーチ／ジェフユナイテッド千葉エリートプログラムコーチ／神奈川大学非常勤講師）、1 月 17 日

（文責 衣笠竜太）

## NCH 新聞研究会

1. 研究内容：本研究会は、神奈川大学が所蔵する NCH（North China Herald）新聞（ONLINE 版）の日本、中国、韓国、東南アジア諸国に関連する新聞記事の研究を目指している。
2. 活動内容：研究会の構成員が『良友』画報研究会 <http://liangyou.jugem.jp/>、中国人留学生史研究会 <http://chineseovers.jugem.jp/> と重複するため研究会単独での活動は活発ではなく、一部のメンバーが 2018 年 11 月に上海で開催された「円卓会議－中国・上海都市研究の新動向」に参加するのみであった。来年にはより活発な活動を展開したい。詳細は <http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/> をご参照ください。

「円卓会議——中国・上海都市研究の新動向」

日 時：2018 年 11 月 9 日（金）・10 日（土）

場 所：中国・上海社会科学院

共 催：神奈川大学非文字資料研究センター・上海社会科学院歴史研究所

《プログラム》

【開会挨拶】小熊誠（神奈川大学非文字資料研究センター長）

熊月之（上海社会科学院歴史研究所元所長）

【報告】（一部、神奈川大学関係者のみ）

- (1) 『良友』画報—スポーツと KODAK, そして Shanghai Municipal Council 英文資料について 孫安石（神奈川大学非文字資料研究センター研究員）
- (2) 上海文化と香港・華僑 村井寛志（神奈川大学非文字資料研究センター研究員）
- (3) 『良友』画報と百貨店 菊池敏夫（神奈川大学非文字資料研究センター研究員）
- (4) 都市上海の中の創造社作家たち 中村みどり（元神奈川大学教員）
- (5) 上海の黄浦江と哈爾濱の松花江の内河航行権について 李美大一（神奈川大学外国語学研究科博士後期課程）

（文責 孫安石）



## 声の文化

今年度は下記のとおり、外部講師による講演会と、共同研究グループのメンバーによる研究会を実施した。

日 時：2018 年 7 月 6 日（金）18：00～19：30

場 所：3 号館 401 室

講演者：兵藤裕己（学習院大学文学部教授）

タイトル：物語テキストの政治学

日 時：2018 年 12 月 19 日（水）18：00-19：30

場 所：20 号館 417A 室

報告者：深澤徹（神奈川大学外国語学部教授）

タイトル：「憑依する〈からだ〉を演戯する——世阿弥『風姿花伝』を読む——」

来年度は前期と後期に研究会を実施する予定である。

（文責 村井まや子）

## 日韓対照言語研究

「日韓対照言語研究」は「日韓両言語におけるヴォイス・テンス・アスペクト・モダリティの対照研究」を当面の課題として掲げ、研究活動をすすめている

### （1）研究会の開催

日 時：12 月 10 日（月）17：00～19：00

発表者 1：尹亭仁（本学国際文化交流学科教員）

テーマ：「日本語を母語とする韓国語学習者の誤用にみる諸相——テンス・アスペクトを中心に」

発表者 2：尹聖楽（武蔵野学院大学非常勤講師・東京大学大学院博士課程・本学 2011 年度慶南大学交換留学生）

テーマ：「事実条件を表す「たら」と「-았더니」の対照分析」

年 2 回以上の研究会を計画しており、来年度は日本語を軸に対照言語研究の観点から中国語やスペイン語のテンス・アスペクトの研究者にも参加を呼びかける予定である。また海外で対照研究を行なっている研究者との意見交換、共同研究・共同執筆もすすめる計画である。

（文責 尹亭仁）

## 各国近代文学の研究

### 1. 講演会・研究会の開催

第 1 回研究会（講演会）

開催日：2018 年 7 月 13 日

会 場：17 号館 216 室

発表者：岡部杏子氏（神奈川大学非常勤講師）

演 題：女性が詩を書くこと

19 世紀フランスの詩人マルスリーヌ＝デボルド・ヴァルモールを中心に

第 2 回研究会（講演会）

開催日：2019 年 1 月 25 日

会 場：17 号館 216 室

講演者：貞廣真紀氏（明治学院大学文学部英文学科准教授）

演 題：大西洋を渡る知識人たち——世紀転換期における「文化」論争について

## 2. 活動内容

本研究グループは、活動 2 年目である。研究対象の時期的な重なりを基軸に据えながらも、研究をめぐする方法や環境・場の異なりについて相互に意識し、意見交換をしながら、領域横断的な近代文学研究の方向性を模索していく。今年度は、2 回の講演会を開催し、ゲストを招いたご講演を頂いた上で、メンバー全員がそれぞれの専門の立場から質疑を行い、意見交換をして、お互いの知見を深めた。

（文責 松本和也）

## 知覚認知システムの普遍性と多様性

講演会・研究会の開催：なし

シンポジウムの開催：なし

活動内容：

本研究グループは、人の知覚・認知の仕組みについて、研究することを目標としており、特に、知覚の様相や認知的様相に共通な普遍性とそれらの様相の相互効果によって展開した多様性を現象・行動観察や計算論的解析などを通して明らかにする活動を行うために共同で取り組んでいる。

本年度は 3 人のメンバーの共同研究をより推進するために共同研究奨励助成「尤もらしさ感と違和感の知覚・感性・認知科学的機序の解明」を獲得し、知覚様相間に共通して生じる尤もらしさの感覚を生起するメカニズムの解明に着手した。

一方で、メンバーがそれぞれに目標に向かって以下の研究活動を行なった。その概要を述べる。

吉澤は、視覚情報と聴覚情報の統合機序について心理物理学実験を行った結果を報告した学術論文（Remijn, G.B., Yoshizawa, T. & Yano, H. (2018) Streaming, bouncing, and rotation: The polka dance stimulus, *i-Perception*, 9, 4, 1-4）を発表した。また、奥行知覚機序における高次視覚情報（陰影など）による低次視覚情報処理過程（両眼視差検出機序など）への修飾について心理物理学実験を行い、認知的情報が感覚的情報を修飾することを、国際会議（Fujiya, O., Yoshizawa, T., Kusano, T. & Saida, S. The influence of a shadow cognitively casted on surfaces on the depth perception in the stereopsis, Annual meeting of the Vision Science Society）において報告した。また、金色という知覚が基本色名としての機序を持つ知覚であるかを心理物理学的知見と ERP 計測結果をもとに検討したところ、脳神経科学的にも、心理学的にも金色は光沢のある黄色と処理されている可能性が明らかになったことを国際会議（Yoshizawa, T., Kojima, H., Matsumoto, T., Sato, M., & Uchikawa, K. ERP responses to the perception of glossiness of the basic colors, European Conference on Visual Perception, Trieste, Italy）において報告した。

前原は、輝度コントラスト刺激に対する弱視眼と健眼の視覚野の活性化を比較したところ、両者には有意差がないことを報告した学術論文（Thompson, B., Maehara, G., Goddard, E., Farivar, R., Mansouri, B. & Hess, R. F. Long Range Interocular Suppression in Adults with Strabismic Amblyopia: A Pilot fMRI Study. *Vision*）、定型発達児群における斜め線の線分方位マッチングの成績と年齢との間の相関から、斜め線知覚の正確さは 10 代前半まで継続して発達する可能性を示唆した学術論文（隅田浩子、斎田真也、前原吾朗。読み書き困難児と定型発達児における oblique 効果。基礎心理学研究。）、そして、光干



渉断層撮影を用いて撮像された網膜断層面は、健眼よりも弱視眼の方が厚いことを示した学術論文 (Araki, S., Miki, A., Goto, k., Yamashita, T., Takizawa, G., Haruishi, K., Yoneda, T., Ieki, Y., Kiryu, J., Mae-hara, G., & Yaoeda, K. (2018). Effect of amblyopia treatment on choroidal thickness in hypermetropic anisometropic amblyopia using swept-source optical coherence tomography. *BMO Ophthalmology*, 18: 227, 1-6.) を発表した。

松永は、昨年度に引き続き、音楽知覚能力の学習過程における文化的影響と発達の影響を実験的に検討し、日本人、中国人、ベトナム人、インドネシア人、米国人の間で調性知覚を比較した学術論文 (Matsunaga, R., Yasuda, T., Johnson-Motoyama, M., Hartono, P., Yokosawa, K., & Abe, J. (2018). A cross-cultural comparison of tonality perception in Japanese, Chinese, Vietnamese, Indonesian, and American listeners. *Psychomusicology: Music, Mind, and Brain*, 28, 178-188.) を発表し、日本人の二重音楽の能力が脳内でどのように表現され、また、その能力がどのように獲得されるのかを国際会議 (Matsunaga, R. (2019) Bi-musically enculturated brains: About present-day Japanese listeners. The 21st Congress of Japan Human Brain Mapping Society. Symposium (invited). March/15-16. Tokyo University) で報告し、人間の脳内音楽認知メカニズムについての基調講演 (Matsunaga, R. (2018) Cognitive modeling of music perception. The 9th IEEE International Conference on Awareness Science and Technology & The 3rd International Five-Sense Symposium. September 19-21, 2018) を行い、人間の脳内音楽認知処理が初期の音楽聴取経験に伴って変化することを示した脳磁場測定実験の結果を国内学会 (松永理恵・竹下悠哉・横澤宏一・阿部純一 (2019) 第二音楽 (日本伝統音楽) を学習し始めた年齢がバイミュージカルな聞き手の脳内音楽知覚処理に与える影響。第 35 回日本脳電磁図トポグラフィ研究) で報告し、日本の子どもが音楽スキーマを獲得していく過程と北米の子どものそれとを比較し、音楽スキーマ獲得過程における文化普遍的特性と文化特殊的特性の同定を試みた結果を国内学会 (松永理恵・Pitoyo Hartono・横澤宏一・阿部純一 (2018)。音階スキーマの発達過程における文化普遍的特性と文化固有的特性：欧米の子どもと日本の子どもの比較。日本音楽知覚認知学会平成 30 年度秋季研究発表会抄録原稿集, p. 14-15, 龍谷大学) で発表した。また、当該分野において著書 2 冊を分担執筆した。

これらの研究成果をもとに今後、共同プロジェクトなどを通してグループの目標とする課題を解明する予定である。

(文責 吉澤達也)

## 学びの見える化研究会

### (1) 研究会の趣旨

各自の研究テーマを持ち寄り、研究報告及び意見交換を行う。

専門職等の人材育成の見える化を行い、教育・学習のあり方や体系化を検討する。

### (2) 各自の研究テーマ

#### ①学内研究者

テーマ 1: 「潜在的ボランティアを活動に誘うため条件設定と環境づくり」

齊藤ゆか (神奈川大学人間科学部・教授)

テーマ 2: 「学校体育におけるダンス授業の指導観の育成について」

太田早織 (神奈川大学人間科学部・助教)

#### ②学会研究者

テーマ 3: 「研究開発における効果的な暗黙知見える化手法の開発研究」

森和夫 (株式会社技術・技能教育研究所・代表取締役)

テーマ4:「若者の個人化・社会化支援及び第三の支援」

西村美東士（聖徳大学・元教授，東京都板橋区・社会教育指導員）

⑤参加メンバー

テーマ5:「若年無業者に対する支援のあり方の検討」

新宅圭峰（認定特定非営利活動法人育て上げネット・役員）

テーマ6:「乳幼児健康診査後の保健師における支援の在り方について」

大塚由絵（厚木市役所市民健康部健康づくり課・課長）

(3) 研究会の実施日

基本的に夏と春を除き，月に2回（土曜日）で全20回の実施予定。

4月28日，5月12日，5月26日，6月16日，6月30日，7月7日，7月14日，9月1日，9月15日，10月13日，10月20日，11月10日，11月17日，12月15日，1月12日，（全15回）

（予定）1月26日，2月9日，2月23日，3月2日，3月9日（全5回）

（文責 齊藤ゆか）